

## 文献紹介

岩鼻通明著

『絵図と映像にみる山岳信仰』

海青社 2019年3月 221頁 3,000円＋税

評者は、本書の本文を読む前に研究業績一覧をみて、その多さに驚かされた。著書(23点)、論文(92点)、その他(136点)、2004年以降の講演記録(42点)と多数に及んでいる(他大学への出講、学会委員など、学内映画上映、国内・在外研究、科学研究費などの外部資金は除く)。

本書の各章は、「ほぼ現地調査を行った年代順」(1頁)の研究業績に従って構成されている。その構成は、次の通りである。

はじめに

- 第一章 絵図と縁起にみる伯耆大山信仰
- 第二章 絵図にみる戸隠山信仰
- 第三章 出羽三山の絵図・映像記録と日本遺産
- 第四章 絵図にみる立山の宗教景観
- 第五章 絵図にみる白山信仰
- 第六章 比叡山参詣と葛川参籠
- 第七章 絵図にみる霊場寺院の他界観—羽黒山・慈恩寺・立石寺を事例として
- 第八章 成相寺参詣曼荼羅と天橋立図
- 第九章 国絵図にみる霊山の表現
- 第十章 村絵図にみる宗教景観—米沢藩領中山村絵図覚書

コラム

- 1 藤岡謙二郎先生と卒業論文／2 水津一朗先生と修士論文／3 戸川安章先生と博士論文／4-1『剣岳・点の記』の映画化／4-2絵解き研究会と富山県「立山博物館」の開館／5 小山靖憲先生と白山登山／6 久武哲也先生と葛川絵図研究会／7 日野西眞定先生と山岳修験学会／8 難波田徹先生と参詣曼荼羅／9 渡辺茂藏先生と山形大学教養部／10 光善弘先生と村山民俗学会

初出一覧

索引

研究業績一覧

第一章は、鳥取県の大山が研究対象地域となっている。本章の前半では『大山寺縁起絵巻』が、後半では「伯州大山略絵図」が研究対象となっている。これらの分析・考察結果から、霊山の絵図の作成目的の1つに、中世的な縁起を反映させることがあったとする。

第二章では長野県の戸隠山を研究対象地域とし、「信州戸隠山惣略絵図」を中心として『善光寺道名所図会』、「信州戸隠山之図」を分析している。その上で、近世絵図においても中世的テリトリーが反映されているとして第一章の見解を補強するとともに、歴史空間を描いた絵図や絵画史料の歴史地理学的調査・研究の重要性を指摘している。

第三章は、3つの論説を1つの章としたためか、他の各章と比較して論旨が明瞭ではない。すなわち第一節では資料としての映像記録の重要性、第二節は羽黒山と戸隠山を事例とした「地域おこし」、第三節は「三山登山案内」の鳥瞰図の絵図を分析している。このように各節が個別の研究目的となっており、関連が明確でない。このため本章の意義が不明瞭となっている、といえる。ただ第一節は、本書のタイトルに示されている「映像」と関連している。著者が、絵図類とともに映像に関心を寄せた発端は興味深い。その原因が、「二〇〇三年十二月にソウルへ短期派遣で出かけた折りに、非常に寒冷な気候のために、野外調査が困難であったことから、暖かい映画館の中に避難し」(1頁)たことに起因していたことにあるという。研究の発端・契機・関心というのは、何が幸いするか分からないものである。また、第三節の分析に際しての、バスや鉄道などの交通関係に対する造詣の深さは驚くものがある。

第四章は、立山が研究対象となっている。分析した資料は、立山信仰の世界観を描いた「立山曼荼羅」の絵図類、木版刷の「立山登山案内図」、そして近世後期の測量に基づく「立山之図」である。最初の「立山曼荼羅」は、基本的に立山信仰を布教するための「絵解き」に使用され、極めて宗教色が強いものとして位置づけている。「立山登山案内図」の分析に際しては、主に登坂経路の

時代的推移を検討し、宗教的色彩から観光的要素への移行を明らかにしている。最後の「立山之図」に関しては、前の2者が方位・縮尺を軽視した立山信仰の主観的世界が描かれているのに対し、石黒信由による測量に基づく客観的な絵図としている。

第五章においては、白山信仰を対象とした絵図類の分析を通して、白山の加賀馬場・越前馬場そして美濃馬場の3つの登山口の経路を検討している。最初に「白山図」を分析し、美濃馬場の美濃禪定道を描いた絵図で、その禪定道に関わる主観的宗教世界を表現したものとしている。これに対して測量図である「白山之図」は、複数の禪定道を表現した絵図として位置づけている。その上で、各時期の紀行文等から登坂経路の変遷を検討し、加賀馬場を利用する経路が衰退していったことを明らかにしている。

第六章では、最初に比叡山への参詣を対象に、僧侶・修験者などの宗教者に対して、一般庶民の参詣を当時の旅日記や道中日記を資料としてその参詣路を明らかにしている。その結果として、表参道あるいは走出路が使用された循環的行程を示していた。そして、その意味を物見遊山の「遊」ではなく、「聖」としての意義を有しているとしている。また巡礼と遠距離参詣とを一体化して究明する必要を指摘している。

さらに、大縮尺の古地図を研究対象として、新しい古地図研究を進展させた葛川絵図研究会の動向を検討するとともに、その活動における久武哲也氏の研究の意義を検討している。

第七章では、霊場寺院の他界観に関して、山形県内の3つの寺院の羽黒山・慈恩寺・立石寺を対象に明らかにされている。この場合、既往の研究成果である羽黒山を研究対象として用いた方法論を、慈恩寺と立石寺とに適応している。すなわち、古地図(慈恩寺の「慈恩寺一山絵図」、立石寺に関しては「羽州山寺立石寺寶珠山略絵図」)に表出している地名を中心とした文字情報を手掛かりに、3か寺の中世における修験道との関連や山中他界観・地獄極楽思想を究明している。

第八章においては、「成相寺参詣曼荼羅」図に描かれた景観を検討し、中世の成相寺の様相を考察している。また、国宝の「天橋立図」や「与謝之大絵図」をも援用し、近世期の成相寺の境内景

観を明らかにしている。しかし、本章の研究目的が「読み解く試み」や「解説を試みる」と表現されており、評者にとっては「何を明らかにしたいのか」あるいは「何が明らかになったのが」が理解しづらかった。

第九章では、各地の霊山の国絵図における表現様式を検討している。研究の発端は、霊山の1つである白山が白く描かれていたことから、他の霊山の様相を究明したものである。研究方法としては、江戸時代に作成された国絵図を研究対象に霊山の表現様式に関して、地域別および時代別に検討している。結果として、①東西での差異の存在、②慶長・正保の国絵図と元禄国絵図との時代差、③霊山の禪定道の未描写、の3点が指摘されている。地域軸と時代軸の両面からの研究視点は、まさに歴史地理学的研究方法といえる。

第十章では、現在の山形県上市市中山を描いた3枚の村絵図を検討している。絵図に表記された寺院や神社の宗教施設および文字情報に留意することが、絵図研究の深化に繋がると指摘している。

以上、本書の各章の内容を紹介してきた。各章は、大部分が既存の論考を集めたものである。このため、論旨が不明確な章がみられることは確かであるが、学会誌などに掲載された一般に目に触れない研究成果を提示したことには一定の評価が与えられよう。しかし評者は本書の意義を別のところに求めたい。

著者は、2019年3月に山形大学農学部を退職されている。この退職にあたり「山岳信仰に関する調査研究を集大成したもの」(1頁)とされている。本書は各論考に目を向けるよりは、コラムの内容に注目すべきであろう。評者はこのコラムにこそ本書の意義があり、まさに退職に際しての出版の目的があると思っている。最初に本書の内容にコラムの構成まで示したのは、この意味であることを理解していただきたい。

10に分かれているコラムでは、藤岡謙二郎先生から始まって月光善弘先生まで延べ約40名の恩師や先生方の名前が出てくる。その方々をコラムの構成とともに列挙すれば(敬称略、再出は省略)、次のようである。1 藤岡謙二郎・井上秀雄・浮田典良・足利健亮・吉井良三・水田義一、2 水津一朗・岸俊男・樋口隆康・尾崎雄二郎・一海知義・小川環樹・小川琢治・高安国世、3 戸川安章・高

取正男・大友義助・石原潤・金田章裕, 4-1 新田次郎・木村大作・黒沢明・藤原正彦, 4-2 林雅彦・佐伯幸長・朴銓烈・佐伯令麿・米原寛, 5 小山靖憲・佐藤和彦・黒田晃弘・田中智彦・上村俊邦・戸田芳実, 6 久武哲也・小林致広, 7 日野西真定・長野覚・重松敏美・宮本袈婆雄・松井憲幸・小林計一郎・水上憲宗・北村皆雄・五来重・圭室文雄, 8 難波田徹・下坂守・福山敏男, 9 渡辺茂藏・織田武雄・内田秀雄・別枝篤彦・坂本英夫・浜谷正人・樋口忠成・米地文夫, 10 月光善弘・野口一雄・江田忠・奥村幸雄・武田正・大友義助・伊藤清郎・市村幸夫。

これらの方々の研究分野は、地理学は当然として歴史学・民俗学・宗教学など多岐にわたっている。職業も大学の教官・教員、寺社の住職・宮司、映画監督など多岐に及び、著者の学問的関心の広さを示している。このコラムを通読すれば、著者の研究の推移の一端を知り得るものといえ、著者の研究遍歴を「読み解く」のに適したコラム欄になっている。まさに、退職を記念する好著として位置づけることができよう。

最後に、著者による6冊目の単著の出版に対して、大過なき退職とともにお慶びしたい。お疲れ様でした。

(古田悦造)